

緑豊かな里山の景観を守る

「皆伐」「間伐」を試行

苦東開発地域で工業用地の分譲を手掛ける苦東（吉野三郎社長）は、同地域に広がるミズナラ、コナラ林の試験伐採を進めている。開発方針の柱である「自然と産業の共存」の実践的な取り組みで、今年度中に計19杉の伐採が完了する予定。雑木林が維持された里山の景観を守ると同時に、緑豊かな産業空間として同地域の付加価値を高める狙いだ。

環境重視の企業にアピール

苦東

自然と産業 共存



試験伐採で切り出されたミズナラやコナラの丸太

同地域の開発面積は約1万7000畝。そのうちミズナラやコナラを中心に約25000畝の雑木林が広がる。里山の原風景のような豊かな植生は同地域の特長になっているが、中には強風などが原因で倒れたままのものも目立ち、景観を維持するには人の手入れが必要と判断した。

同社は昨年3月、アイシン北海道が立地する臨空柏原地区北東部の5杉で初の間伐を実施。今年度は50杉四方の木をすべて切る「皆伐エリア」18区画（4・4杉）と、間隔を空けて伐採し残った木の成長を促す「間伐エリア」（9・6杉）に分けて行う。3月までは終わる予定で、皆伐、間

伐それぞれの経過を見極める。NPO「苦東環境コモンズ」のアドバイザーも参考にした。

切り出した木は、パルプ原料やシイタケ栽培用のほだ木などに売却し、事業費を賄う。同社では、旧会社時代の1990年代前半にボランティアによる育林活動を行ったことにはあるが、新会社移行後の本

格的な試験伐採は初めて。

こうした森づくりは、同社が掲げる「生物多様性」や「自然との共生」を目指すためだ。

「環境重視型の企業誘致を進めるには、足元の自然を維持する必要がある」と同社。間伐で雑木林の手入れをしておけば、立地した企業が敷地内の緑地帯として残しやすくなる。

ることも考慮してある。

同社は今回の成果を確認しながら、今後の方針を決める考え。吉田和正専務は「自然の維持と企業誘致の両立は簡単ではないが、NPOの協力も得ながら保全活動を続けたい。環境を重視する企業にアピールできれば」と話している。